あらう』と云ひ、更に其の友人が予の事を語つたところが、『其れなら一ッ其の松村君に會ひたいものだ』と云ひ、旁〻其言傳を受けたことのあつたのを記憶する。ソコで兎も角も公に予の意見を知らせてやらんと心得、其後予の主張の雜誌『警世』を毎號送つてやり、其中に『今日の政治界の大立物たる伊藤も大隈も皆駄目だ、所謂る功利の人で、深い高いところが無い、即ち其衷に『天』がない、其處に到ると西鄕や横井や勝は偉いものだ。』と書いて置いたところが、又々友人を通じて、『己れは开なに思はぬ、勝や、横井などを开なに偉いとは思はぬ』と云はれたことをも聞いて居る。因つて兎も角も一度互に會はうと云ふことになり、乃ち間もなく帝國ホテルで會うた、而して其時には誰も居らず、唯だ予と公とのみであつたが、其時公は椅子に凭れて、シガーを吹かしつゝ、勝のやうに人を馬鹿にするやうな態度はなく、左ればとて副島伯のやうな丁寧なるところは更になく、一寸頭を下げてお辭儀したばかりで、其後はウント反りかへりて、故と偉相に見せかけるやうな工合で、談が段段と進んで行く中、『時に怎も君達は(耶蘇教の連中を指す)小い事を八ケ間敷云つて大なることを忘れて居る、(小さな事とは我身の不品行を云ひ、大なること、は、憲法の稿定を指す)我輩はナカ〳〵君達の爲めに働いたものだ、尤も君達の爲めばかりではない、國家の爲めだが、彼の憲法稿定の時、宮内省がナカ〳〵八ケ間敷、鳥尾等の保守黨が容易に屈せず、憲法の中、基督教を公許にして、他の宗教と一視同仁にすることを嫌ひ、ナカ〳〵大議論をやつたものだ。而して味方は少く敵は多く隨分骨が折れたことである。然し君等は殆んど之を知るまい。我輩は君等の敵ではなく味方であるのだ』(此意味は然るに往々君達の中で、予を攻撃するのは、怪しか

らぬと云ふのである。）ソコで予が頭を下げて之れに謝すると、又々重ねかゝつて、『又大隈と比較して青年を世話せぬと云ふが、（之れは予が『警世』で事業を遺すものは、學校を持つて居る大隈である、と云つたに答へたものと思ふ。）我輩もナカ〳〵やつて居るのだ、何とか云ふ碁打の小僧も世話してやつて、今は西伯利亞へ行つて居るとか、誰某を世話して物にしてやつたとか云つて、ナカ〳〵自分の功勞を吹聽された。然し此時になると、今まで氣取つて居るから、厭な奴だと思つて居た伊藤公も追々と天眞になつて來たから、之れなら親しく談せると思ふやうな氣持になつた。ソコで此時は色々と文明論にも入り、日本の精神界の問題にも入つて歸り、其後二三度も會ひ、尙ほ書生を十人ばかり伴れて行くことを約束して、間違つて書生ばかりをやつて、色々と維新當時の談などを聞かせたりしたことがあつたが、要するところ、其の不品行は攻擊して居たが、政治上の主義に於ては、同じことであつたので先づ我黨と肝膽相照すものがあつた。思ふに若夫れ伊藤公にしてなからんか、日本も變な國家主義で固つて仕舞つて、今日の發展を見なかつたかも知れぬ。因て日露戰役終つてポーツマウス條約の節、大に日本の大政治家を海外へ紹介してやりたいと思ひ、大隈伯や伊藤公の傳記を調べた時、其便利を得んことを公に談すと、日本タイムスの頭元君に命じて、予と交渉せしめられたこともあるので、予は今日に於ても、尙ほ公を忘るゝことが出來ぬ。況んや公が國家の爲めに異鄕に斃れられた最期を見るに於ても、謹んで公を追懷せずしては止むことが出來ないのである。

横井小楠先生

予が嘗て勝海舟先生に向うて、横井小楠は如何なる人でありましたかと尋ねたら『ウム横井の見識の高邁にして、經綸の絶大なるには驚かされた、先づ當時無比であつた』と。ソコで又た西郷隆盛は如何なる人でありましたかと尋ねたら、『ウム西郷は智慧の足りない男であつた。故に如彼な最期を遂げた。然し愛に富んで居る上に、意志が強かつたから、此男は横井の經綸を行らせたなら、天下の事成るべしと思うた』と云々。ソコで今より二十八年以前、海舟先生が、『小楠遺稿』に序せられたる文を紹介すれば左の如し。

往歳始與二小楠先生一相見。一面如二舊識一、欣心定交。談及二海外之事一。先生賦レ詩云ク。

帝生二萬物靈一。使レ之亮二天功一。所以志趣大。神飛六合中。

僅々廿字。足以窺見先生胸呑二五洲一、眼空二一世一之氣象。此詩存二筐底一墨痕猶新。而冥契既逝。發言莫レ質。余亦老矣。今閲二遺稿一。不レ禁涕之泫然一也。因綴二數語卷一一。以志二余感一。

明治廿二年初春　　弟子　海舟勝安房

此の序文を見れば、如何に海舟先生が、此の横井小楠先生に推服せしかを知るに足る。更に又た茲に『弟子勝海舟安房』と丁寧に記されたる文字を見よ。西郷隆盛は常に海舟に向うて、先生と呼べり。然るに其の西郷の先生たる海舟が、又横井に向うて先生と呼べり。如何に横井小楠が當時に群を抜いて居つたかゞ分るであらう。

横井小楠は俗名を半四郎と云ひ、文化六年八月肥後の熊本に生れた人である。予は未だ其の委しき傳記を調べて居らぬが、唯『小楠遺稿』丈に載せてあるところを見

ると、特別に誰某を師としたとも見えず、先づ獨學獨創的の人で、夙に經國の志を懷き、王者の師を以つて自ら任じて居たやうである。又學問は自ら朱子派であると稱しては居たが、其の實は古學若くは陽明派の方に傾いて居たやうである。

天保十年藩主の命により、江戸に留學し、藤田東湖等と交はり、英名諸名士の間に傳はる、因て水戸烈公東湖を介して、之を招聘せんと試みたが、先生笑つて應ぜず、水戸の如き慷慨自ら負み、竟に國家に益なきものには與みし難しと思つて、キッパリ之を斷つて仕舞つた。其の自ら重んじて居たことは之れに由ても分る。

然し此時は先生まだ三十歳位で若かつた、從つてまだ〳〵其學問、知識、見識、思想などに、ウント力を用ひねばならぬ時であると考へ、而して之を爲すには、江戸の如き騷々しいところよりは、寧ろ田舍の方が宜しと思つたから、僅か一年にして故鄉熊本に歸り、只管自修自學に從事し、遂に大に發明するところあり、乃ち當時の學風たる博覽强記の知識、小廉曲謹の道德を斥け、『學問は內、靈臺を磨き、外、經國を志すに在り』と斷じ、いよ〳〵家塾を開いて、子弟の敎育に從事したるところが、後日天下の名を爲した長岡是容、萩昌國、下津休也、元田永孚などの靑年が、其下に集つた。

時に越前の藩士三寺某、藩主の命を帶びて、其儒を天下に求めて居たところから、先生の名を聞いて來り學び、大に先生の人物と其議論に服し、其去るに臨みて、是非とも一度日本全國を周遊し、其序に越前へも御立寄を願ひたしと云つたことなどもあるより、嘉永四年中國より東海道を上り、越前に入り、越前公の前に於て大學を講じて、事務を談じたところが、藩の上下皆先生に靡き、後日大政に參與して英名

を擧げたる由利公正の如きも、其時直に弟子の禮を取り、どこまでも先生に隨行せんと申出たほどであつた。

然しながら先生自身には、四方を遊歷して、別に何んの得るところもなく、長州では村田清風、京都では梁川星巖、尾張では田宮如雲等とも交つたが、敢て驚くところもあらず、更に星巖が、京都に帷を下せば、應分のお世話致すべしと申出でたるも、態好く之を辭し、同年八月、又々鄕里に歸り來り、而して『天下人無し』と獨語しつゝ、慨然自ら任ずる心を深くした。

斯て其後間もなくペルリーが浦賀に來り、露艦が長崎に來り、天下騷然として來たところより、先生竊かに海外の情勢に通ぜんことを志し、歐米に於ける醫術竝に火術等の事を聞き學び、遂に彼れの長を採つて、我が短を補ふべしと主張し始め、間もなく當時の俗論を脱して、いよ〳〵大膽に開國論を唱へ、『鎖國は我國祖宗の意に非ず、今日の事開鎖共に正理公道に由るべし』と闢言し、傍若無人の概を示した。因つて當時君命を帶びて長崎に行つた時、卽ち其意を具して、之を當局に呈したと云ふことがあるが、其れは兎も角もとして、丁度其時に、吉田松陰が遙々と先生に會はんと欲して、長州より熊本に來たのであつたが、其の留守中で會へなかつたので、非常に殘念がり、長い〳〵手紙を遺して去つたと云ふことである。吁、當時此の兩雄をして相會せしむることの出來なかつたのは、實に千載の恨事である。

其後先生益々天地の氣運、宇内の大勢の趨くところを察し、愈々開國論を唱へ、西洋の醫術砲術等の修めねばならぬ所以を說いて居たところが、之を嫌うて門人や朋友の中にも離れ去るものあり、爲に藩中の評判がいよ〳〵ます〳〵惡くなつた。

然れども先生更に顧ず、居を風光明媚の沼山に移し、悠悠時の來るを待つて居ると、其人物を慕ひ、其説を聞き傳へて、四方より來り訪ふもの次第に加はり、彼れ西洋の兵制に明なる肥前の田中虎六も來り、當時長崎に海軍を研究し居たる勝海舟先生も、書を人に托して、一日相共に語らんことを請うたほどであつた。尤も此時には會ふこと能はず、前條にある會見の如きは、其後先生が江戸に上りし時の事であつた。又當時越前春嶽公より屢〻使者を以て、經國の要に關する種々の質問等があつたので、一々之れに答へて、日本國是のあるところなどを開陳して居たが、遂に此の春嶽公に聘せられて越前に赴き、萬國通商の利、農工の振起、銅鐵山の開掘、軍艦幷に西洋機械の購入、其他目下の急に應ずる内外の策を獻じ、春嶽公を通じて幕府を敎へんと圖り、間もなく春嶽公が、幕府の總裁職となるに會うて、共に與に江戸に入り、國是十二條を當局に呈したが、其中には將軍の上洛、諸侯の室家を其封土に還すべしなど云へる如き、周圍の人を驚倒せしめた、奇拔の説もあつたのである。

先生は夙に王者の師を以て任じて居た。こゝを以て當時此の春嶽公の知己を得たを幸に、幕末の政治には、頗る貢獻するところがあつたのである。左れば幕府も其の材を認めて、之を直接幕府に採用せんと試みたのであつたが、先生は思ふところありとて、笑うて之に應ぜず、間もなく又々鄕里に起臥し、相變らず、諸方より尋ね來る天下の志士に接して居たが、其の志士の中には、坂本龍馬もあつたと云ふことである、知らず兩雄の談せしところ何事ぞ、思ふに薩長の聯合、開國の大方針、海軍の設立等其の重なるものであつたらう。

斯て明治維新となるや、朝廷召して參與と爲し、薩の大久保、長の木戸、土佐の後藤等と相並んで、廟堂に列せしむることとなり、更に新政府の爲め盡竭したが、聞くところによると、維新當時の御詔勅の如きは、多く先生の意見と筆とになつたと云ふことである。如何に先生が非藩閥の身でありながら尚且つ其重を當世に爲して居たかゞ、之れのみにても分るであらう。

然しながら先生や、其の宿昔の抱負を以て、永く朝廷を翼くること能はず、明治二年正月浪朝の途次、京都寺町に於て、兇徒十二三名の爲めに斃さる、遺憾何ぞ限りあらん。尤も先生や既に其の爲すべき事を成し遂げた。而して今日我等をして尚ほ其偉大なる神魂に恍惚たらしむるものあるを憶ふ時には、先生や遂に死せずと云ふべきである。

右は横井小楠先生が如何なる經歴の人であつたかを示さん爲めに、ザツト其の大略を紹介したものである、然し茲に小楠先生に就て語らんと欲するところは、其傳記ではなく、其の人物論である、其見識である、其經綸である、其悟である、其宗教である。請ふ少しく之を說かん。

横井小楠の宗教

横井小楠の人物も、見識も、議論も、何も箇も、皆其の宗教より出て居ると思ふから、先づ第一に其宗教如何を說いて見たい。卽ち有名なる其の詩に、

神知靈覺湧如レ泉。　不レ用二作爲一賦二自然一。
前世當世更後世。　貫二通三世一對二皇天一。

と云ふのである。而して其の自註に

前世王者の道を明にし、心を當世に盡し、以て後世を開く、之を君子の志と謂ふ。

と附言してある。然れば横井小楠の宗教は、神でもなく、佛でもなく、基でもなく、先づ儒であるが、而かも其儒たるや、孔子以後の儒ではなく、ズツト溯つて、堯舜禹湯文武周公等と同樣に、只夫れ活ける皇天上帝に事ふるに在つたやうに思はれる。乃ち嘗て明治天皇の御勅諭に、『上天の惠に應じ、祖宗の恩に報ゆ』とあるのを引て、明治天皇は、確かに我が道會主張の信者で在したと云つた如く今や此の横井小楠に就ても亦た、其の如く云ふことが出來ると思ふ。

然り、小楠は確かに、此の皇天を信じて居た。前に掲げた『帝生三萬物一、使レ之亮二天功一、所以志趣大、神飛六合中』とある詩の中にも之を窺ふことが出來る、乃ち一言にて小楠の宗教を云へば、『皇天上帝卽ち天地の主宰者なる神なるものが、確かに實在して居る、而して我等人間は、此の天帝の命を帶びて、此の世に出て來て居るものであるから、凡そ何事を爲すにも我等は恒に此の天帝に對する責任を考へて居らねばならぬ』と云ふのである、而して是れ卽ち宛然たる道會の主張『事天の一途』に外ならぬ。

ソコで此の皇天の命を帶びて、此世に生れて來たのであるから、此の皇天の命をさへ、此世に行へば其れで人間の職分は濟むのであるが、然し何れが天の命であり、何れが天の命でないと云ふことを怎して知ることが出來るか、其れが先づ第一六ケ敷いではないかと云へば、小楠は之れに答へて、『何に开な事は、チツトモ六ケ敷い

ことはない、唯だ良智良能を澄したら其れで可い、恰も月影が清水に寫る如くに神の心が我心に寫る、而して之れが神の命であり、之れが神の命でないと云ふとが直に分る、即ち神知靈覺湧いて泉の如し、作爲を用ゐず自然に賦すぢや、何も六ケ敷く思案するにも、議論するにも及ばぬ、唯明鏡をさへ持つて行けば、自然と萬象が寫る如く、其の如く自然と神知靈覺が湧いて出るから、其の神知靈覺を將て、前世王者の道を明かにし、當世の爲めに盡し、更に後世の爲めに謀らねばならぬ、是れ横井小楠の宗教で又在世の目的であつた。

横井小楠の見識

當時の儒者とか漢學先生とか云へば、大抵皆腐つたものであつた。然るに横井は彼等と其類を異にして居た。横井は前述の如く、毎時も皇天に對して天命如何と考へ道理如何と顧み、曾て其間に私心を挾んだり、情實に捉はれたり、依姑地に陥たり痩我慢などに驅れたるEがなかつたかち、去就即離が直ぐに分つた。即ち西洋の醫術が善いと聞き、實際に當つて其實效を見ると云ふと、直ぐに其醫術を用ゆることにした。又砲術は兎ても西洋に敵はぬと聞くと、直ぐに之を研究し、いよ〳〵善しと定つたら、之を學ぶことを人々に勸めて、加之時の漢學者流は勿論の事、大抵の見識家でも、蘭學者を除くの外は、皆鎖國攘夷を主張した、然るに小楠の如きは恒に何事をも對皇天の上より斷じ來るが故に、『四海の内皆同胞だ、此同胞が相交らぬと云ふ道理やあるべき』と唱破し、身は漢學者でありながら、又當時あまり西洋事情には通ぜざるにも拘らず、直に開國論を主張した。然し其等の事は、まだ〳〵

驚くに足らぬが、小楠が更に其抱負を述べて、堯舜孔子の道を明にし、西洋機械の術を盡し、何んぞ富國に止まん、何んぞ强兵に止まらん、大義を四海に布くのみと大語したるに至つては、今日と雖ども、尙ほ其の大見識に呆れざるを得ないのである。

此時は先生既に西洋各國の人情風俗歷史などをも、聞き知りに知つて居たので、所謂る對皇天の上より如斯風に考へた、『成るほど西洋文明なるものは、大艦の製造、蒸氣の利用、鐵道電信などの發明幷に武器の精練等に於ては、古今獨步であるに相違ない、然し其の道德に至つては、まだ〳〵氣の毒なほど卑いものだ、內は互に嫉視反目して、多年の間、其國土に戰爭の絕えたることなく、外は無暗に弱い人種を虐めて之を征し、到頭我日本にまでもやつて來た、彼等は、未だ王道なるものを知らぬ、大義なるものを知らぬ、故に彼等の機械の術は學ぶべきだが、左る代りに、我れは我堯舜孔子の道を以て、彼等に王道なるものを敎へてやらねばならぬ。又今時我國の識者は、動もすれば富國を云ひ、强兵を云ふ、勿論其れも結構だが、然し我國が富國になつたからとて、强兵になつたからとて、其れで威張つて居るばかりならば、矢張り彼等西洋人と別に選ぶところはない。故に我等は此の富國强兵と共に大義を四海に布かねばならぬ、卽ち彼等西洋人をして、大義の在るところを知らしめねばならぬ、而して王道を天下に實行せしめ、戰爭を止めしめ、掠奪を止めしめ、弱肉强食の蠻行を止めしめ、所謂る四海同胞の實を擧げしめねばならぬ』と、是れぞ是れ横井小楠が當時に懷いて居た大見識である、乃ち『神は飛ぶ六合の中』の一句も亦此の大見識より出で來て居るのであつた。而して聞くところに依ると、

此れは維新後參與になつてからの話であるが、先生は切りに全權大使となつて、海外へ行きたいと云つて居られたとの事である。其れは海外へ行つて所謂大義を說き彼等をして四海同胞の實を擧げしめねばならぬと考へて居られたからであるとのことである。

顧みれば、我日本の識者なるものは、維新前には、西洋人を夷狄視して以て鎖國を唱へ、維新後には俄かに開國論者となるのみか、西洋人を神佛の如くに敬ひ、大義を彼等に說いてやらんと云ふやうな意氣の如きは、塵ほども其胸中に存せず、只只御無理御尤で過ごし來り、數十年後の今日に於て、ヤツト西洋文明も、左程感服すべきものでないと分り、更に目下の大戰を見て、始めて西洋人の馬鹿さ加減が明白になり、ソコで成程西洋機械の術は學ばねばならぬが、今後は我れより彼等に王道を說き大義を敎へ、玆に新しき文明を我國より起さねばならぬと云ふことが、少しづつ解つて來たと云ふ位であるが、之を思ひ之を想へば、横井小楠は實に偉いものである。

横井小楠と吾黨

富國でなければ不可ぬ、强兵でなければ不可ぬ、然し富國强兵ばかりで、其間に對皇天の考へもなく、大義を布くの抱負もなく、唯だ其の富と强とを以て、貧を虐し、弱を壓すると云ふばかりならば其れは人間社會でなく、禽獸界である。然るに今日西洋人の爲すところ、又た爲せしところを見るに、怎であるか、吾人は今日に於て、横井小楠を偲ばざるを得ない。ウイルソンを始め、米國人は、常に正義とか

人道とか平和とか自由とかを云ふ、然し其の正義とか人道とか平和とか自由とか云ふものは、彼等の間にのみ行はるゝもので、之を他の人種や弱國には及ぼさない、こゝを以て彼等はヒリツピンを取り、キユーバを脅かし、布哇を呑み、メキシコを虐めながら、尚ほ且つ人道や自由を叫んで居る。英國は紳士を以て誇つて居る。而も此の紳士たるや、印度を盜み、支那を掠め、南阿を奪ひ、世界の各處に其獅子の旗を飜して、常に其の屠るべきものを窺うて居る。然而して獨逸は、亦大逆無道を敢てしながら、尚ほ天の寵民なりと自稱しつゝ、我利我慾を貫かんとして居る、然則ち何處に大義やある、何處に王道やある、我等は横井小楠ならずと雖も、實に憤慨に堪へぬのである。左れば今後に國を興すものは、須く此の大義の旗を飜へして進まねばならぬ。然るに、今日の我國人を見るに、此大義を辨へて居るものは極めて尠く、矢張り僞善的の米國人や、自欺的の英國人や、驕兒的の獨逸人の後につき、動もすれば禽獸的の性格を現はさんとして居る、卽ち軍人は唯殺人劍を提ぐることを知つて、活人劍を提ぐることを知らず。政治家は、唯我國の利害否、甚だしきに至りては、唯だ己れ一個の利害をのみ考へ、曾て平天下の大策に及ぶなく、實業家は唯だ金其物を目的となし、曾て其金によりて、國と人とを救ふべき道を知らず。宗教家は、各々其の宗派の爲めに爭ふを知つて、曾て對皇天の心なし、こゝを以て私情蔓り、我慾漲り、禽心發し、獸意動き、滿目の人士皆豆の如き小人物となつて仕舞つて居る。我黨は不敏と雖ども、對皇天の虛靈を磨くに於ては、曾て人後に落ちざらんことを期するものゝ、其の力に於て、其業に於て、未だ見るに足るものなしと雖ども、幸に其の見識に於ては、自然に天命に合するものあるを覺ゆ。乃ち知

己を横井小楠に寓して玆に此稿を草す。

海舟先生の墓に詣づ

一日電話あり曰く、『私は梶梅太郎です、一寸御目にかゝりたいが』と、梶梅太郎君とは誰ぞ、是れぞ是れ勝海舟先生の令息である、而して若しも先生にして、私を思うて義を思はざりせば、正に伯爵家を嗣ぐべきの人なり。予此に於てか、答へて曰く、『イヤ之れは久濶、速に御來駕を待つ』と、暫くして門鈴鳴る、出て迎ふれば則ち梶兄其人なり、十數年會はざる間に、鬢髪已に胡麻鹽に化し、額頰已に皺を帶び、『あゝ實に齡が寄つたな』と思はしめぬ。乃ち客間に請じて坐せしむれば、一寸點頭したるのみ、別に挨拶らしき挨拶をもせず、別に御辭儀らしきお辭儀をもせず、

唯『やゝ隨分久しぶりぢやつたナー、時に至急御頼があつて參つたので』と極めて簡單に、極めて明白に、極めて出し抜けに云ふあるのみ。予乃ち曰く『ウム實に珍しい、十數年振りだ、能くこそ來ました、予は今日に至るまで、未だ曾て老先生の恩義を忘れたることなし、而も久しく墓參せず、又兄を訪ふこともなし、汗顔之れに、過ぐるなし』と。斯くて、熟々其の容貌と其の言語と其の態度と其の挨拶振とを窺ふに、正に是れ宛然たる老先生其儘なり、因て予は思はず『ヤー兄は實に乃父に能く似て來た。否、乃父其儘なりと』叫ぶや、兄直ちに答へて曰く、『ウム然し一つ異つて居るものがある、其れは魂だ、魂丈が異つて居る。而して、老父より己れの方が少し背が高いばかりぢや』と、而して是れ亦老先生の口吻其の儘である。時に其日は互に再會を約し、『兎も角も予より墓參をかねて、兄の寓居を訪ふべし』と

て別れしが、其の後一日、友人と共に腕車を驅り、目黒より洗足村に赴きて、不意に梶兄を驚かせた。梶兄は聊か面喰の態であつた。因て先づ墓に詣づべしとて、折柄其處に居合せたる小童に展墓の水と案内とを賴み、久々にて恭しく先生の墓に詣でた。場所は極めて平凡な場所、石碑は極めて小型の物、然而して之れを守るに老木なく、之れを表するに頌文なく、唯だ短樹綠葉の周圍に茂り、冷然たる石階の其の前に默するあるのみ、予此に於てか、今更無量の感慨に打たれぬ。夫れ海舟先生は、如何なる人ぞ、大西鄕に智慧を授け、之れをして常に先生と尊稱せしめ、横井に海外の知識を與へ、之をして其神を六合に飛ばさしめたるもの、然而して佛國の公使の誘惑を斥けて、何處までも日本帝國の獨立を保持し、十八回の暗殺に逢うて尙ほ其の志を喪はず、眼を宇内に馳せて、我國の國是を定め、知己を當世に求めず、遂に且元と相對し、遂に維新の大業を成就し、苦忠を將に絕えんとするに全うしたるもの、實に曠古の偉人である。乃ち西鄕横井すら、已に其下に在り、況んや大村、伊藤、大久保、山縣の如きものに於てをやである。然るに飜つて顧れば、西鄕の像は上野に立つて居る、大村の像は九段に立つて居る、而して伊藤、大久保、山縣等の銅像は皆夫々立派に出來て居るにも拘らず、獨り先生のみ、野徑の傍、深草の間に、其骨を埋めて、人の之を訪ふものも稀れである、是れ果して何故ぞ。正に是れ我國今日の風潮が、權に媚び勢に附き、曾て義人を思はざるの致すところあらざるなきを得んやと。斯く感じ、斯く慨して、悄然墓前に徘徊し、去らんと欲して去る能はず、言はんと欲して言ふ能はず、獨り叢中に默立すれば、蠟て梶兄の來り迎ふるあり、乃ち相携へて其寓居に到る。寓居と言へば寓居であるが、所謂百姓

家なる茅屋のみ、主人の快心、快貌、快言は、例に依て變るなきも、何んとなく、悲哀の感想を我胸臆に起さしめぬ、之れを聞く、海舟先生は曾て其の家人に告げて曰く、『予は元來幕府の臣なり、其の一時謀反人と目せられしも、是れ我が苦衷のあるところなりき、予は夙に予が生命も財産も、予は一物をも之を我子孫に遺すことなく、皆悉く之れを舊君卽ち德川氏に獻じ居れり、然れば予が無き後は、我伯爵も我所有も、悉く皆之を德川氏に獻ぜよ』と、左れば伯爵たる勝家は、今日德川氏に因て相續せられ、堂々たるその門邸は、舊に依りて氷川邸上に儼存するも、其の眞の令息たる梶兄は、則ち他姓を冒して、玆に百姓に伍して其生を送りつゝあるなり。

予は先づ其寓居に入りて、更に座上に飾らるゝ海舟先生の寫眞に禮し、其れより汲みて出さるゝ澁茶を喫し、開きて供せらるゝ、罐入りの鹽煎餅を嚙み、軈て友人と共に立ち去らんとすれば、梶兄立て海舟先生が維新當時に撮られたる彼の大劍を擁して昂立せらるゝ寫眞一葉を取り出して之を贈らる。於此乎、予梶兄を顧みて曰く、『あゝ此れぞ是れ予が曾て先生より及止の刀なりと示されたるもの、冀くは今猶ほ之を一見することを得るか』と。梶兄卽ち笑つて曰く『开なものは一つもなし、みんな氷川町の家に在る。予は父爺のものを一つも持たぬ、又持つを好まぬ、是予が父の志にあらざればなり』と。予は今日梶兄の不如意なる理由の存するところを詳にせず、然れども其の落々たる胸宇、其顏回的態度、其物質の外に超然たる高察は、實に予をして窃かに有繋は海舟先生の令息なりと思はしめぬ。而して又た彼れ海舟先生の墓と相待ちて、世上を瞰下し、俗界を睨視するの感あらしめぬ。あゝ海舟先生や今や亡し矣、而して國步の急なるは維新當時の急なるよりも急なり、

海舟先生の墓に詣づ

南洲何處に在る、小楠何處に在る。甲東何處に在る、松菊何處に在る。彼等すら已に在らず、而して獨り子孫を先にし、國家を後にする群小のみ朝野の間に翺翔す。予於此乎、海舟先生の墓に詣で、以て我が憂慎の氣を遣ると云爾。

編輯名家文庫
第十三編

著作者　松村介石
編輯者　齋藤嘲爾
發行者　東京市神田區西小川町二丁目一番地　株式會社東亞堂
右代表者　取締役社長　木村定次郎
印刷者　東京市牛込區榎町七番地　竹内喜太郎

大正九年十一月十五日印刷
大正九年十一月十八日發行

正價金壹圓六十錢

不許複製

發行所　東京市神田區西小川町二ノ一　電話番町五三七　振替東京一七一　株式會社東亞堂

日清印刷株式會社印刷

——（縮刷名家文庫既刊書目）——

◎堀内將軍　先づ腹を錬れ　一圓五十錢
◎中村　論　二圓三十錢
◎福本日南　英雄の世の中　一圓五十錢
◎安田翁　金の爲に　一圓五十錢
◎大隈侯　青年の修養　一圓五十錢
◎後藤男爵　自治の論　二圓三十錢
◎加藤高明伯　運命の訓　一圓五十錢
◎澁澤男爵　處世の和　一圓五十錢
◎尾崎行雄　永遠の法　一圓三十錢
◎小村壽太郎　心身の健　一圓五十錢
◎添田廣谷　我が十年　一圓六十錢
◎福島將軍　經濟の訓　一圓五十錢
◎大山將軍　國民性の發揮　一圓六十錢

（各冊送料十八錢）

31
849

終